



画像①九頭竜川の舟橋



越中富山名産

富山の名物『ますのすし』。その木桶の蓋には舟橋が描かれたレッテルが貼られています(画像



■53

『舟橋』

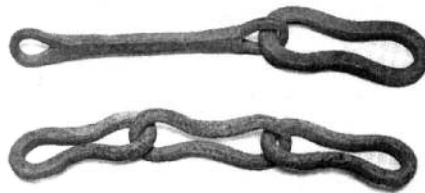
画像はカラーと交換しています。

衣川製鎖工業・衣川良介社長

①。富山に行くとき必ず食べた私の好きな駅弁です。地域興しのイベントなども盛になり、輸送や保存方法が工夫されたことで都市部のデパートやスーパーでも時折販売されています。又、ネットで購入することも出来るようになりました。

この舟橋は九頭竜川に掛けられたものを描いた江戸時代末期の書家・文人の亀田鵬斎の絵を模写したと言われています。規模も大きく、常設だったのが富山名物になり、沢山の絵が描かれています。虫眼鏡で丹念に見ると40艘ほどの舟を数えることができます。柴田勝家が天正6年(1578年)に渡したと伝えられる舟橋で用いられていた鎖の一部が柴田神社に

富山 船橋の鉄鎖(雄雄)



画像②舟橋の鎖

橋が出来るまで、300年以上の間、舟橋が使われたのです。

ヨーロッパ地域のドナウ川やライン川などの大河とは異なり、我が国の川は背後の山から前面の海まで、距離が短く高低差が大きいため急流が多く水害も多発していました。このよう

な川に橋を架けることは、当時の技術では困難を極めました。また国防の観点からも、川に橋を架ける事を嫌ったのです。歩いて渡るか力こに渡るか、江戸時代には渡河のために天竜川や



画像③市川鉄橋の現在(JR神戸線)

大井川などに多くの川人が足が働いていました。2級河川、市川(いしかわ)が北から南に流れる、ここ姫路では渡し舟が活躍していました。弊社の住所は姫路市飾磨区阿成渡場で最も下流の渡し舟の乗り場でした。この川に初めて橋が架かったのは明治8年(1875年) 西国街道の木橋です。二番目は明治9年(1876年)、生野鉾山から飾磨港まで鉾石を運ぶ『銀の馬車道』の『生野

橋』です。

次に橋が架かったのは明治23年、今のJR神戸線になった市川鉄橋です(画像③)。当時は明治21年に設立された『山陽鉄道』でした。この鉄橋は全長550m、川幅はそれほど広くないのですが、川原が広く長い鉄橋になりました。レンガの橋脚に鋼製の橋桁を乗せたシンプルで明治の鉄橋は今も現役で活躍しています。

ちなみに、市川の名の由来は、平安時代『枕の草子』に『しかまの市』が現れますが、播磨国府の市が近くにあり、この川を商品の運搬路としたことから市川と呼ばれるようになったと考えられています。

☆ごなたか柴田神社(福井市)に展示されている舟橋の鎖の画像を送ってください。